

知恵産業・経営大会2018

価値創造経営に学ぶ ～知恵産業への挑戦～

企業経営や経営支援等の各分野で活躍中の講師を招き、講演会を開催しました。
大会当日の様様をご紹介します。

特別
講演

リーダーが育つ55の智慧

似鳥 昭雄 [(株)ニトリホールディングス 代表取締役会長兼CEO]

50年前、22歳の時に100万円を元手に30坪の家具店からスタート。当初は苦戦したが、「ロマンとビジョン」を掲げ、「人のため、世のため」との思いを経営のベースにするようになってから急成長した。「欧米並みの住まいの豊かさを日本人々に提供する」というロマン、30年後に100店舗という壮大なビジョン。それまで日本にはなかった「ホームファニッシング」という概念を初めて持ち込み、家具だけでなくカーペット、カーテン、寝装品などを手頃な価格で取り揃え、住まいのトータルコーディネート提案するとともに、チェーンストア化を目指してきた。

その実現に不可欠なのが、人財育成である。社員1人ひとりを、入社時より20年先のことを見据え、配転教育を通じてさまざまな仕事の経験を積みながら、一流のスペシャリストへと成長させる。この社員育成の仕組みが実を結び、少数精鋭ならぬ多数精鋭の集団になれたことが、会社の成長につながったのだと実感している。



第1
分科会

経営者の
姿勢

社長の心得 ～強くてよい会社をつくるために～

平井 省吾 [(株)小宮コンサルタンツ 代表取締役社長]

経営に必要なのは、「知恵」を行動できるレベルに具体化すること。普段から多様な情報に接し、価値ある関連づけを見出すトレーニングを。また、お金を追うのではなく「よい仕事」を追う、すなわち関わる人すべてが喜べる仕事を当たり前のようにやっていくことで、力が発揮され結果がついてくる。強くてよい会社をつくるためには成長と安定のバランスも重要。経営環境が悪化する今後は資金ポジションを厚くしておくことを勧める。



商品の踊るステージをつくる町工場～社長、自らステージに立つ～

田中 和広 [(株)田中金属ホールディングス 代表取締役]

金属部品の製造企業だった当社は5年前には倒産の危機に瀕しつつも、開発した節水シャワーヘッドを自ら店頭に立ち実演販売を始めた。「商品が踊るステージ」を自分でつくったことが反響を呼び窮地を救った。ものづくりに自信があっても売る場所を持たない製造業の方は多いが、作り手自身が魅力を伝えれば感動を与えることができる。経営者は自ら売場に立ちお客様の声を聞いて、商品づくりに生かしていくことが大切である。



外食産業の明日～働き方と未来をともに考えてみないか～

佐藤 裕久 [(株)バルニバービ 代表取締役社長]

人通りのなかったさまざまな街に出店し、賑わいを創り出して来た。結果的に多角化となったのは、当社が外食産業というより、自らの思いで食べもの屋をやりたいと思うスタッフ個々がやりたいことを実現させてきたから。ゆえに意欲ある素敵な人材が集まり続けている。経営者は権限の委譲に苦慮されるころだと思うが、事業を次世代に渡していくなら、自身は若者たちの力を信じて、どれだけ後方支援に徹することができるかが大事ではないか。



IT活用による旅館改革とその展望

宮崎 知子 [(株)陣屋 代表取締役 女将]

旅館のことも経営もわからなかった私たち夫婦が継承した旅館は借入金10億円。早急に問題点を洗い出して経営改善の方針を決め、それに沿って従業員が頑張れる環境を整えるために、オリジナルのクラウド型基幹システムを自社開発した。その結果、現場の状況から経営に関わる情報まですべて見える化し共有することで、もてなしの質が向上、効率が上がり業績も回復。システムも「陣屋コネクト」として他旅館向けに外販し好評である。



日本一の幸せ創造企業を目指して

青谷 洋治 [(株)坂東太郎 代表取締役会長]

拡大路線の最中、社員が次々と退職し労務倒産の危機に。そんな折に母の墓参で「働く人を幸せにしてあげなさい」という母の声がかえり衝撃を受けた。すぐ全従業員を集めて「夢を共有しながら全員が幸せになれる会社になる」と誓い、全員が主役の会社を目指してきた。毎年「事業発展計画発表会」を開催。これは全社員が一堂に会し、目標を達成することが個人・会社さらには地域のお客様の幸せに繋がっていることを認識、共有することを目的とした会であり、成長への決意を新たに、社員全員で盛り上がる。



わが社の事業の取組～製造業から医療・福祉分野への進出～

安道 光二 [ワタキューセイモア(株) 代表取締役会長]

義父にあたる先代社長は創業当時の製綿業から、病院への寝具リースをきっかけに病院の給食、医療関連事業へと、苦難を乗り越えて事業を広げてきた。誠実な人柄で新規開拓の分野では素人ながらも、得意先から要望があればとにかく何でもやるという姿勢で努力した結果が事業拡大につながった。その謙虚な姿勢と感謝の気持ちを当社の基盤として伝え続けるため、社是を「心」とし、今も徹底した社員教育を実践している。



脱・下請け実現で大躍進!世界中から注文を受ける経営術

北川 一成 [グラフ(株) 代表取締役社長]

後継者として入社した当時は、ギリ貧状態の下請け印刷企業。技術も社員のモチベーションも低かった。そこで、新たな「顔」をつくるべく社名を変更してイメージを一新、デザインでの差別化に注力。同時に印刷技術も高め、「デザイン×プリンティング」を理念に、デザインと印刷の双方に精通した上でよりよい表現を目指してきた。今後も優れたクリエイションをしている人との協働も含め、「捨てられない印刷物」を極めていきたい。



企業再建-私の経営哲学～どのようにして強い会社に生まれ変わったか～

伊藤 麻美 [日本電鍍工業(株) 代表取締役]

父が創業しためっき加工会社が後継者の放漫経営で知らぬ間に傾き、会社を守りたい一心で代表取締役役に就任。需要の低迷する時計めっきを離れるべく「医療」「健康」「美容」を鍵に新たな方向性を模索。自社サイトを立ち上げ、営業に駆け回り、技術的に困難といわれた医療製品の加工に成功し評価されたことで社員も自信を持ち黒字回復。「100年企業」を合言葉に人材の層を厚くし、次世代も働きやすい環境づくりを目指している。

